

## 滋賀県立近代美術館協議会(第31回)概要

1 開催日時：平成22年(2010年)3月9日(火)午後2時00分～4時30分

2 開催場所：滋賀県立近代美術館 会議室

3 出席者：滋賀県立近代美術館協議会委員 9名

尾崎正明委員 北川邦之委員 鹿田由香 瀬古委員 辻喜代治委員

土田隆生委員 橋本享子委員 松村順子委員 三原サダ子委員

滋賀県立近代美術館事務局

秋山館長 青山副館長 桑山総括学芸員 高梨学芸課長 鈴木総務課長

関県民文化課課長

### 4 会議次第

(1)滋賀県立近代美術館 秋山館長あいさつ

(2)議 事

会長の選出について

平成21年度事業実績(案)について

平成22年度事業計画(案)について

その他

### 5 概要

(1) 会長の選出について

委員の互選により、尾崎正明委員が会長に選出された。

(2)平成22年度事業実績(案)について

#### 【委員】

中期経営計画に掲げられている展覧会の自主財源比率が、目標の61%に対して平成21年度実績は37.5%になっているが、自主財源とは観覧料と考えてよいのか。また、事業費との差額はどのようにしているのか。

#### 【事務局】

自主財源は、観覧料、物品の売り上げおよび団体等からの助成金である。展覧会を開催するための事業費と自主財源との差額は、県の一般財源で補っている。なお、美術館全体の運営経費を節減してその差額の埋め合わせに努力をしているが、本年度については、年度当初予定していた観覧料などが落ち込んだため、例年になく大幅な補正予算をお願いしているところである。

**【委員】**

展覧会に係る自主財源比率は目標を大きく下回っているが、事業内容を見せていただくと、教育普及などでもさまざまな事業を積極的に実施されており、美術館としては充実した取り組みになっていると思っている。しかしながら、残念なことに、この数値は見た場合、美術館はなんだという評価につながるのではないかと。充実した事業内容からするともったいないと思う。芸術の振興には時間もお金もかかることなのだから、県としてもがんばっていただきたい。

**【事務局】**

県としては非常に厳しい財政状況にあるが、美術館として実施していかなければならない事業は後退させることのないように取り組んでいきたい。本年度は観覧料が大幅に落ち込んだが、展覧会についても、さまざまな工夫を凝らして、当初見込んだ観覧料を確保し、収支がきちっととれるように努力したいと考えている。

**【委員】**

自主財源比率の理想型は100%ということか。本年度の実績が37.5%であるにもかかわらず平成22年度の目標数値は65%というのは、ハードルが高すぎないか。

**【事務局】**

観覧料収入などの自主財源だけで展覧会の事業費が賄うことができれば理想型といえるが、現実にはなかなか困難なことである。平成22年度の数値目標は、平成23年度までの3年間を期間とする中期経営計画で設定したものであり、本年度実績が大幅に落ち込んだからといって数値目標を下げるということは考えていない。来年度は巻き返して達成できるよう美術館として努力していきたい。

**【委員】**

本年度は大幅に落ち込んだとのことだが、これまでの観覧者の推移はどうなっているのか。また、全国的に美術館の観覧者の動向はどうなっているのか。

**【事務局】**

昭和59年の開館から平成5年ころまでの10年間は、常設展と企画展の観覧者が15万人程度で推移してきたが、その後の10年間は10万人程度となっている。ここ数年間は9万人程度となっており、本年度はこれまでで最も少なく5万2千人程度に落ち込む見込となっている。全国的には、都市部の大規模美術館と地方の公立美術館との二極化が進んでおり、平成18年度の日本博物館協会の調査では、国立では1館あたり年間数十万人の観覧者を数えているが、地方の公立美術館では1館あたり8万人弱となっている。

**【委員】**

文化庁の地域文化芸術振興プランとして実施された永田萌展覧会の観覧者が、約3,500人と多くを数えているが、会場ごとの内訳はどうなっているのか。中期経営計画の数値目標になっているアウトリーチ活動も15回に対して5回と落ち込んでいるがどのような理由があるのか。

**【事務局】**

永田萌展覧会の観覧者については、大津会場で1,100人、長浜会場で1,400人、高島会場で1,000人となっており、いずれも、当館と成安造形大学、長浜市、高島市との連携により実施したところである。アウトリーチ活動の落ち込みは、新型インフルエンザの影響が大きいものと考えている。

**【委員】**

美術館では、講演会やワークショップなどの教育普及事業を数多く実施されている。300人を越える参加者の講演会も見受けられるものの、数十人程度の参加者という事業が多いように思うがどうか。また、今、兵庫県で小倉遊亀展が開催されており、新聞などで大きく広報されている。これを見るとわざわざ兵庫県まで行かなければと思うが、この美術館ではいつでも小倉作品を見ることができる。こういうことはもっと広報すべきだと思えるがどうか。

**【事務局】**

大規模美術館では、新聞社等と事業経費を出し合って、数多くの観覧者を見込める大規模な展覧会を開催することにより、充実した広報を展開している。これにより多くの人々の目に触れることとなり、集客にもつながっているが、地方の公立美術館ではこのような運営体制をとることが困難であり、広報面での充実が図れないことも一因である。当館としても、関係機関、団体等とも連携を図るとともに、工夫をして効率的な広報に努め、集客を図りたいと考えている。

**【委員】**

展覧会に関連する講演会では、学芸員が学問的な話をするより、実際に作品をつくっている作家や身内の方が話をする場合の方が、多くの方々の関心を引くということがある。常設展になかなか人が集まらないのは、国立でも公立でもそれほど変わらない。企画展では十重二十重に取り囲まれた作品が常設展で展示されていても、そのときは人が少ないという状況にある。企画展には人は集まるが、まだまだ常設展を楽しむというところまでは至っていないのではないか。

**【委員】**

ワークショップルームを整備され、ワークショップもやりやすくなると思うが、利用者の反応や使い勝手はどうか。これにより、美術ファンがもっと増えればいいと思っている。

**【事務局】**

ワークショップルームは整備が完了したところであり、先般、染織のワークショップをしただけではあるが、水回りや汚れ防止といった面でも使い勝手はよくなった。気兼ねなくワークショップを楽しんでもらえるような施設になったこともあり、より以上の充実を図りたい。

**【委員】**

展覧会の観覧者は5万2千人程度になるとのことだが、美術館の利用者総数はどれくらいか。また、利用者総数からすると、低予算でさまざまな事業を実施していると思うがどうか。人口の多い都市部や施設が充実した大きな美術館ではいざ知らず、大規模な展覧会をこの美術館で開催することはリスクが高いと思う。それより、地域で有名な作家を掘り起こすような展覧会を開催すればどうか。

**【事務局】**

展覧会だけでなく、教育普及の参加者やギャラリーの観覧者などを含めた美術館の利用者総数は、本年度は減少するものと見込まれるが、ほぼ13万人前後となっている。展覧会だけでなく施設の管理運営費など美術館の総経費は、ここ数年1億8千万円から2億円くらい、展覧会の経費は5千万円となっており、これをどう評価するかというのは難しい問題である。地域で有名な作家の展覧会ということでは、本年度は、郷土ゆかりの作家の展覧会を館蔵品を中心にして開催したところである。

**【委員】**

教育普及事業を実施する体制はどうなっているのか。また、中期経営計画の数値目標の各項目の平成20年度の実績はどうなっているのか。自主財源比率が60%を越えているのは非常に立派だと思う。普通は40から50%くらいではないか。今年はたまたま非常に悪かったということではないか。

**【事務局】**

教育普及事業にほぼ専任する学芸員が一人とワークショップを担当する嘱託の学芸員一人が配置されているが、係やグループを設置するところまでは至っていない。数値目標の平成20年度の実績については、中期経営計画を平成20年度の策定したことから、実績としては把握できなかったため表記していないが、平成19年度実績と類した数値となっている。

(2)平成22年度事業計画(案)について

**【委員】**

美術館を利用するという文化がまだまだ日本では根付いていない。学校教育の中で美術をもっと大切にしていかなければならないが、小学校に英語が導入されるなど逆に美術の時間が減らされるという状況にある。美術館がまだまだ認知されていないということから、琵琶湖博物館が行っているサテライト授業とまではいなくても、各学校に美術品の複製画やポスター等を掲示する場所、いわばサテライトコーナーといったものを検討されればどうか。展覧会についても、格調が高すぎるような気がする。もっと生活に根ざした、何とか鑑定団のような博物館的な要素を加味した気楽に楽しめる展覧会を計画されればどうか。旭山動物園が動物の生態を見せるように工夫して集客に成功したように、展覧会の見せ方にも工夫が必要ではないか。

**【委員】**

収集予算が凍結されているとのことであるが、寄贈による収集も少ないように思われる。企画展が難しいという状況にあるだけに、館蔵品を増やしてうまく運営していくという発想も大切である。来年度に開催される白洲正子展は大いに期待している。県が一体となって広報していくことも考えればどうか。また、日本国中から中高年を集めるくらいの仕掛けを工夫するなど、うまく運営すれば、来年度の数値目標に大いに貢献するのではないか。

#### 【事務局】

作品の寄贈については、基本的には所有者からの申し出によるものとなるが、当館の収集方針に沿うものであるかどうか、当館が所蔵するにふさわしいものであるかを収集審査委員会において審議していただいて受け入れるということになる。申し出のあったものをすべて受け入れるということではない。白洲正子展についてはファインアートの展覧会ではなく、滋賀県のよさを全国にアピールするというのが狙いであり、そのことが滋賀県の各地域にある優れたものを再認識していただくことにもなるかと思っている。この展覧会はNHKと連携して開催するものであり、その広報力を活用するとともに、白洲正子にゆかりのある滋賀を歩くツアーなどの企画にも取り組んでもらえるよう働きかけている。また、県の観光部局やビクターズビューローと提携して開催にあたりたい。白洲正子展は幅の広い内容であるだけに、学校においても美術だけでなく国語や社会などの分野でも活用していただける展覧会であり、観光分野などにも貢献できるものとしていきたい。また、この展覧会だけでなく、美術館としては今後も幅の広い視点からの展覧会に取り組んでいくことが必要であると考えている。

#### 【委員】

世の中が変わっていくことに対しては、危機感も持って対応することが必要である。美術館も二極化が進んでいるということであるが、それへの対応が必要である。その一つとして連携があるが、関係部局や関係施設との連携、小中学校だけではなく幼児教育や高校・大学も含めた学校教育との連携が重要である。全国美術館会議や日本博物館協会がどうなっているのか知らないが、あまり機能していないのではないか。地方の美術館が苦境に立っている現在、イギリスやフランスでの事例のように、それぞれ美術館があらゆる努力をするとともに美術館が連携して国に協力を働きかけ財政支援を勝ち取ることが必要ではないか。また、これまでの文化事業をきめ細やかに点検することも重要である。さきほど、地域の芸術活動の見直しということも議論されたが、県内の作家が出品する美術展覧会も現在は美術館の企画展示室とギャラリーで、前後期の2期に分けて12月という時期に開催しており、観覧に来られる方にとって非常に不便である。美術館としてのポリシーがあることは理解するが、時代の変遷とともに、美術作品の展示ということと文化事業を二元的に捉えた、かつミュージアムかギャラリーかという壁を越えた柔軟な運営により、地域に根ざした美術館に発展していくと考える。県の美術展覧会を県民のアートフェスティバルとして実施するなどの検討を行い、常設展示室も含めた全館を使えるようにしていただき、書、工芸、立体、平面の全作品を一時期に見られるようにされることを強く要望する。

#### 【委員】

県の美術展は2,600人程度しか集客できていないという状況にもあるが、開館25周年を迎えて、県の美術展や美術館のあり方について検討をしていただくよう要望する。

#### 【委員】

教育委員会に働きかけて、小学校から高校までを対象に、美術館に行こうというキャンペーンをしてもらったらどうか。自然にあふれた環境にもあることから、校外学習としても取り組んでもらえるようにすればどうか。

#### 【鹿田委員】

平成22年度の上半期にホームページのリニューアルをするとのことであるが、家族向け、中高年向け、学校向け、旅行者向けのページなどいろいろな方々に向けてのページを作成し

て広報すればどうか。

**【委員】**

高齢者にとっても美術館の展覧会などの文化事業は大切であり、いろいろな文化事業に参加してみたいという意欲は高い。また美術館にとっても大きな収入源でもあるにもかかわらず、県の広報紙などを見ると、美術館の展覧会などの情報の記事は小さくて、高齢者にとっては見にくくて見逃すことが多い。各団体の機関紙を活用するなど、みなさんの目に触れるような、より積極的な広報をお願いしたい。

**【事務局】**

大々的な広報を実施するという事は困難な状況にあるが、展覧会ごとに対象を絞って効率的な広報を行うとともに、できる限り工夫をして多くの方々に知っていただくよう努める。また、本日いただいたご意見やご提言を踏まえて美術館の運営にあたっていきたい。